

タイトル	北海道における中小企業家同友会の教育(7)
著者	竹田, 正直; TAKEDA, Masanao
引用	開発論集(101): 33-52
発行日	2018-03-16

北海道における中小企業家同友会の教育(7)

竹 田 正 直*

はじめに

北海道における発展方向の創出に関する基礎的研究の推進にさいして、道内の企業数と従業員数の圧倒的部分をしめる中小企業の研究は欠くことができない。^(注1)

その際、今や、加盟企業の経営者数 5,780 人と 6 千社に迫り、北海道経済にますます大きな影響をあたえてきている一般社団法人北海道中小企業家同友会（北海道同友会）の分析と研究は、いっそう重要性をましてきている。すでに経営者会員は、全国都道府県に存在する中小企業家同友会全国協議会（中同協）のなかで全国第 1 位の組織数を誇っている。中同協加盟会員数の 13% を占めている。

この組織的発展のかなめとなっているのが、「共育」をキーワードとした社員教育や経営者の自己教育、とくに、幹部養成の「同友会大学」での教育、さらに、「経営者大学」の活動である。北海道同友会の機関誌『北海道同友』第 66 号、2018 年新年号で、北海道同友会の二人のトップが年頭の抱負を語っているが、ともに「共育」活動の重視を語っている。守和彦代表理事（㈱ダテハキ取締役会長）は、2017 年 11 月 6 日、第 34 回全道経営者「共育」研究集会 in NISEKO が倶知安町で開催され、全道から 500 人の参加者があり、「同友会会員であることに誇りを感じた」という声が多数寄せられ大成功を収めたと述べている。そのうえで、「変化が激しい時だからこそ、自社を客観的に眺め、学びあう仲間とともに、次の対策を考え行動することが大事であり、ますます同友会での学びが貴重な存在となっています。」と「共育」と学びの大切さを訴えている。^(注2)

もうひとりの藤井幸一代表理事（サンマルコ食品㈱代表取締役社長）は、「統計によると、道内新卒者の 3 年以内の離職率は、大学卒で 37.2%、高校卒で 48.2%。（中略）人が採れない中で、離職率の高さは我々企業にとって大変な痛手です。（中略）せっかく入った新入社員の初心を大切にしつつ、一人前の社会人として磨き上げていくことが焦眉の課題」と述べている。^(注3)

これまで筆者は、「北海道における中小企業家同友会の教育」のテーマで、同友会大学の発足の経緯や理念、また、北海道同友会の牽引者の一人であった大久保尚孝氏の業績や同友会大学の第 1 期～第 8 期同友会大学の活動を分析してきたが、それをもとに、本稿では、第 9 期と第 10 期同友会大学の分析を行う。これらの分析を通じて、「共育」概念の内実をさらに探求す

*（たけだ まさなお）北海学園大学開発研究所特別研究員、（北海道大学名誉教授）

る。^(注4)

第1章 北海道中小企業家同友会第9期同友会大学

(1) 第9期同友会大学の日程と講義概要

第9期同友会大学は、1985年1月10日(木)に入校式が行われ、同年4月23日(火)まで、北海道同友会事務局がおかれていた第1ビル（札幌市中央区北4条西16丁目北向）で、基本的には、毎週、火曜と木曜の夜6～9時、30回の講義と5月15日(木)夜6～9時の卒業式が行われた。^(注5)

第9期同友会大学の入学者は49名であったが、入校式では、受講生を代表して佐々木原憲一(株)サッポロインテリア営業1課課長が、「決意表明」を行っている。佐々木原氏は、極めて厳しい経済環境のもとで消費は低迷しているが、自立し成長する隙間を見つけるために伝統分野でも先端分野でも挑戦する姿勢の大切さにふれ、さらに次のように述べている。「私達はこの与えて頂いた好機を挫折することなく全うし、自己啓発に努め、急激に変化する時代に対応し得る力と発想の豊かさとして更に鋭い経営感覚を学びとりたいと願っております。」と強い学びへの決意を述べている。^(注6)

第9期の単元テーマは変わっていない。単元Ⅰ「日本経済と中小企業」、単元Ⅱ「経営と法律」、単元Ⅲ「企業会計の基礎知識」、単元Ⅳ「現代営業幹部論」、単元Ⅴ「科学技術論」、単元Ⅵ「中小企業幹部論」である。各講義数は、Ⅰ：5講義、Ⅱ：6講義、Ⅲ：3講義、Ⅳ：4講義、Ⅴ：5講義、Ⅵ：6講義、である。このうち、前回の第8期と異なるのは、単元Ⅱ「経営と法律」が1講義ふえて、単元Ⅲ「企業会計の基礎知識」が1講義減少したことである。他の単元の講義数は前回同様である。

講義担当者や講義テーマの変更は、今回も若干行われている。単元Ⅰでは、明治大学の渡辺睦教授にかわって北海道大学富森虔児教授になり、「戦後日本経済と中小企業」のテーマはそのままである。単元内での順序の入れ替えはあるが、これは、担当者の日程の都合であろう。

単元Ⅱでは、第1講義に札幌学院大学鈴木敏夫教授が「法とは何か～判例にみる法の運用の研究」のテーマで付加されている。また、田中敏滋弁護士に変わって中村仁弁護士が加わったが、テーマ「民・商法の基礎知識」は不変である。他は変わらない。

単元Ⅲで1講義減少したのは、加藤忠重税理士の「企業税務の基礎知識」である。

単元Ⅳは、いつも大幅に交代している。木野口功(株)共同印刷社長（現(株)アイワード会長）以外の3人の講師が変わっている。新しく担当したのは、(株)土屋ホーム土屋公三社長「営業とは何か」、(株)住いのクワザワ山本正信社長「営業幹部の任務と役割」、北海道紙工業材料(株)沢田三尚専務「営業力アップのために～グループ研究」、である。

単元Ⅴは、北海道大学吉田文和助教授にかわって、同じテーマで是永純弘教授が新しく担当している。また、テーマは同じで北海道大学池内了助教授から、北海道大学赤石義紀助教授に担当が変わっている。更に(株)光合金製作所井上一郎社長（現会長）から、北海ダンロ(株)佐藤雄

一専務に変わっている。テーマは不変。単元Ⅵは、「部下をどう教育するか(2)～現代青年の意識と行動」北海道教育大学旭川分校小田切正教授にかわって北海道大学竹田正直教授が「教育とは何か～社会と教育の発達史の歴史」のテーマで、再度担当している。他は、講義順の変化があっても担当者は不変である。

全体として、経営者が担当する単元Ⅳは大幅変更であるが、他の単元は微調整にとどまっている。

(2) 第9期同友会大学の受講・卒業生の特徴と感想

第9期の受講生は、49名が入学し38名が卒業した。卒業率は、77.5%で、第8期の86.7%から10%も下がるかなり低い卒業率である。皆勤賞は19人で、卒業生中の皆勤率は50%で、第8期の56.5%には及ばないが中位である。レポートと卒業論文の平均点が61.1点で、これまでの9期中、9位である。

平均80点以上で授与される優等賞が1名、高瀬捷男清水勸業(株)、取締役営業開発部長である。平均75点以上で授与される努力賞が2人で、柴崎武志恒星設備(株)、工事部設備課長と、本間泰(株)北海道給食センター管理課教育課長代理である。^(注7)

優等賞の高瀬氏は、同友会大学での学習の意義を次のように述べている。「近年我社も苦しい闘いを強いられており、会社の基本方針のたて直しと新たな営業戦略の展開を考えなければならぬ時期にあります。従って、同友会大学には、多くの期待と意欲をもって入学し、卒業まで初志を貫徹することを目標としていました。幸いにして、優等賞をいただくことができ、気持ちも最高潮に達した感があります。今後は、自分自身を一層燃え立たせていくことを目標に致します。」^(注8) ここには、厳しい地域の経済状況のなかで企業の現状への危機意識と新戦略立案への学習の重要性と同友会大学への期待と目標、さらに、それを成し遂げた喜び、そして今後への課題を自らに課す自己発達への限りなき思いが示されている。さすが優等賞を得る力量の持ち主である。講師陣の一人として身の引き締まる思いである。

卒業生のなかで、札幌市以外からは、6人で、石狩市3名、恵庭市と江別市1名、さらに上川郡上川町層雲峡からの卒業生が1名いる。この層雲峡から車と鉄道を乗り継いで受講した福原隆則北海道林友観光(株)(現(株)りんゆう観光)ロープウェイ主任が、皆勤賞を得ていることは、頭がさがる思いである。

同一企業で複数の卒業生を出しているのは、(株)北海道フキ：2名、(株)とんでん販売：2名、北海道昭和風力機械(株)：2名、である。役職者は、取締役が6名で社長が1名いる。

女性は1名のみである。女性の受講増加は重要な課題である。その吉田安子(株)川西製麺所は、卒業式後の懇親会で次のように受講感想を述べている。「男性の中にひとりだけまじって、最初のうちは、後悔したような気持ちも、なきにしもあらずでした、(笑い)私も、この四ヵ月間は、レポート書きで無理がたたり、風邪とたたかいました。いつも徹夜で24時間勤務の状態でしたから、フラフラしながら出勤したことも何度かあります。同友会大学を勧めてくれた専務は、

資料 1 北海道中小企業家同友会「同友会大学」講義カリキュラム（第9期）

日 程	単 元	講 義 テ ー マ	講 師
1985 年 1 月 10 日(木)	開 校 式	◎学長あいさつ，教育委員会の紹介， ガイダンス ◎班編成の発表，性格・職業興味検査	
14 日(月)	単元Ⅰ 日本経済と中小企業	◎社会発展史と経済学	北海道教育大学 教 授 三好 宏一氏
17 日(木)	〃	◎戦後日本経済と中小企業	北海道大学 教 授 富森 虔児氏
22 日(火)	〃	◎世界の政治，経済情勢の焦点	北海道大学 助教授 佐々木隆生氏
24 日(木)	〃	◎北海道経済の歴史と産業構造の特徴	北海道大学 教 授 山田 定市氏
29 日(火)	〃	◎現代の情勢をどう理解するか ～グループ研究～	北海道大学 教 授 森 杲氏
31 日(木)	単元Ⅱ 経営と法律	◎法とは何か ～判例にみる法の運用の研究～	札幌学院大学 教 授 鈴木 敬夫氏
2 月 5 日(火)	〃	◎日本国憲法の性格と今日的意義	弁護士 郷路 征記氏
7 日(木)	〃	◎民・商法の基礎知識	弁護士 中村 仁氏
12 日(火)	〃	◎債権の管理と回収 (1)	弁護士 向井 清利氏
14 日(木)	〃	◎労働法の基礎知識	弁護士 伊藤 誠一氏
19 日(火)	〃	◎債権の管理と回収 (2)	弁護士 向井 清利氏
21 日(木)	単元Ⅲ 企業会計の基礎知識	◎企業の実力を判断するためには ～危い企業の見分け方～	(株)帝国データバンク 札幌支店長 大宮 辰男氏
26 日(火)	〃	◎経営分析	税理士 上村 昭紀氏
28 日(木)	〃	◎経営分析 ～グループ研究～ (2)	同 上

日 程	単 元	講 義 テ ー マ	講 師
3月6日(水)	単元Ⅳ 現代営業幹部論	◎営業とは何か	(株)土屋ホーム 社 長 土屋 公三氏
7日(木)	〃	◎目標の設定と達成の手順と方法	(株)共同印刷 社 長 木野口 功氏
12日(火)	〃	◎営業幹部の任務と役割	(株)住まいのクワザワ 社 長 山本 正信氏
14日(木)	〃	◎営業力アップのために ～グループ研究～	北海道紙工業材料(株) 専 務 澤田 三尚氏
19日(火)	単元Ⅴ 科学技術論	◎科学と人間 ～自然科学の発展と人間生活～	北海道大学 教 授 田中 一氏
22日(金)	〃	◎コンピュータの基礎概念 ～情報化時代への対応～	北海道大学 教 授 青木 由直氏
26日(火)	〃	◎現代の技術革新はどこまで進んでいるか ～社会の発展と技術の歴史～	北海道大学 教 授 是永 純弘氏
27日(水)	〃	◎科学技術の発展と今日的課題 ～グループ研究～	北海道大学 助教授 赤石 義紀氏
4月2日(火)	〃	◎中小企業の技術開発 ～その発想と具体例～	北海ダンロ(株) 専 務 佐藤 雄一氏
4日(木)	単元Ⅵ 中小企業幹部論	◎幹部に必要な現代のマナー (1) ～営業と職場のマナーの再点検～	北海道同友会 事務局長 西谷 博明氏
9日(火)	〃	◎幹部に必要な現代のマナー (2) ～話し言葉の再確認～	(株)北海道邦楽邦舞協会 (元 HBC アナウンスアカデミー所長) 事務局長 平沢 秀和氏
11日(木)	〃	◎教育とは何か ～社会と教育の発展の歴史～	北海道大学 教 授 竹田 正直氏
16日(火)	〃	◎部下をどう教育するか ～現代人の社会心理と組織の活し方～	北海学園大学 教 授 後藤 啓一氏
18日(木)	〃	◎“知恵”のある人間に育つために	札幌学院大学 教 授 方波見雅夫氏
23日(火)	〃	◎中小企業の未来と私たちの課題 ～同友会大学で何を学んだか(グループ討論)～	北海道同友会 専務理事 大久保尚孝氏

※ 卒論の提出を課す

※ 卒業式は総括講義後2週間目に行う 5月15日(水) 18:00～21:00

資料1, 出典: 西谷博明事務局長責任編集『同友会大学第九期生記録集, “継続”, 北海道中小企業家同友会社員教育委員会発行, 1985年7月, 10～11頁。

資料 2

答 辞

吹きすさぶ吹雪と、身もちぢむ寒さから解放されて、木や花にいのちの躍動を感じる春となりました。北国に住む私たちにとって春は感動の季節です。とりわけ今年は、その感動も大きく、いま我身を震わせております。

思いおこせば、今年の1月は、例年にない寒波の到来で、連日吹雪の日が続いておりました。それは、あたかも船出の厳しさを象徴しているかのようでした。私たちは期待と不安をいきながら開校式を迎えたのです。9期ともないますと、この大学の厳しさや過酷さの評判は十分浸透しており、しかも開校式で、大久保専務理事から、身も縮むような叱咤、激励の言葉をいただき、増々不安がつのる思いでした。

しかし、講義が進むにつれ、諸先生方の興味深い内容と、たくみな話術にどンドンひきずり込まれて行くようになりました。時には、手厳しい先生の質問に答えられないという苦痛を味ったこともありました。次第に自分が少年期に戻ったようなある種の快感すら感じるようになって来ました。ところがレポートとなると、普段の勉強不足がたたって、せっかく読んだ文献が生かされず、自分が描いたイメージとはほど遠い内容となってしまう、茫然としたこともありました。とは言え、この4カ月にわたる大学生活では、1分1秒にも、かつてないほどの集中力を発揮し、気力を出し切り、充実した時間を過ごすことができました。その達成感や充実感が、自信となり、確信となって、新しいエネルギーが体内に蓄積されたように思われます。そして今さらながら、同友会が目ざす教育のすばらしさ、同友会大学が意図する人間づくりの教育方針に敬服する次第であります。

今、経営環境は、激動と変革の時代を迎えています。企業も人間も激動と変革の波に翻弄されるのか、それともそれを乗り越え、新しい時代の担い手として、たち現われるのかが問われています。私たちは同友会大学で多面的かつ系統的に学び、複雑に変化する情勢の本質を見抜く基礎的な力を養いました。これからは、企業経営にそれを生かし、まわりの人々の生活を支え、支えられる企業を作りあげていく責務があります。

私たちは、今日の卒業式を人生再スタートの日として、継続は力なりの言葉通り、更に知識と教養を高めて参ります。そして、日本経済と地域経済を支えている中小企業発展の原動力として、その使命と誇りを胸に、一層精進する決意であります。最後に、卒業生一同に代り、諸先生をはじめ経営者の皆様、並びに同友会事務局の皆様に対し深く感謝するとともに、今後一層の御指導、御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。答辞と致します。

1985年5月15日

北海道中小企業家同友会
同友会大学第9期生代表
清水勸業株式会社
高瀬捷男

資料2，出典：西谷博明事務局長責任編集『同友会大学第九期生記録集，“継続”』，北海道中小企業家同友会社員教育委員会発行，1985年7月，75頁。

そんな私をいつも見守っていて、厳しくも暖かく、『這ってでも卒業してこい』と励ましてくださいました。諦めずに最後まで続けられたことを、心からありがたく感謝しています。』^(註9) これを受けて、保護者のひとりとして出席していた川西文男専務は、「吉田に『這ってでも卒業してこい』といったのは事実でございます。(笑い) か弱い女性に、そのような言葉を使ったことを

大変反省しておりますが、(笑い)反面,そういう厳しさを要求できたということをうれしく思っています。このような苦労の中で、自分の本当の人生を切り開けるならば、これに越したものは無いと思います。』^(注10)

ここには、①中小企業の困難ななかで授業料を会社が負担して社員を同友会大学へ送り出す経営者側の思いや期待がでている。しかし、それ以上に、②「這ってでも」という厳しい要求をだすさいにその厳しさを受け止めてくれるという相手への尊敬が感じられ、まさに、「要求と尊敬の教育原則」の実例に触れた思いである。そして、③何よりもすぐれているのは、「自分の本当の人生を切り開ける」ためにという、自社企業の発展以上にその人の人生を切り開くことを重視していることである。これこそ同友会大学が設立時にめざした理念の一つである。

卒業生のひとり、当時、恒星設備係長の柴崎武志氏は、年の瀬の12月29日の昼食時、上司から同友会大学の受講をいわれたときに、「技術系の自分が何故、という気持ちが強く、食事が喉を通らなかったことを覚えています。」と述べているが、学習が進むにつれて変化していく。「講義が進むにつれ、自分の教養がかなり不足していることを痛感させられました。努力賞をいただきましたが、レポート作成の悪戦苦闘ぶりを思うと“苦労賞”と呼ぶのがふさわしいのではないのでしょうか。物事を大局的に見ることの大切さを学ばされました。』^(注11)

また、卒業生の田中進氏(ベル通信工業㈱、技術課長代理)は、「6回のレポートは文字道り死ぬ思いで徹夜して書きあげなければなりませんでした。半ば強制的に本を読み続けた結果、今では本を読むことが習慣となり、同友会大学の講義が終わっても本を買ってきては、少しずつ読み続けています。」と、歴代の同友会大学学長や大久保尚孝専務が、卒業は学びの始まりであるとの励ましを実践している。第9期卒業生記録集のテーマ「継続」にも通ずる実践である。

赤裏茂(㈱北海道フキ、取締役営業部長)は、自らの学びを振り返って次のようにのべている。「同友会大学の期間中は、会社の仕事と、レポートの作成のために、忙しさが倍になったというところですよ。おかげで、夜10時に寝て午前2時に起きるという生活パターンになりました。体も頭もフル回転でしたが、終わってみると、充実した楽しい日々だったと思います。」と、皆勤賞につらなる苦労と充実の日々を語っています。さらに赤裏氏は、その後、北海道同友会の次世代経営者の集い「未知の会」結成につらなる重要な観点の学びについて語っている。『「知ると知らない部分が見えてくる」ということばを、よくかみしめて、これからも何にでも興味を持って、全力で取り組もうと思います。』^(注12) これは、筆者竹田正直が、単元Ⅵの第3講義「教育とは何か～社会と教育の発達の歴史～」で、ロシアの生理心理学者ヴィゴツキーの知識の最近接領域論にふれ、その発展的把握として展開した内容である。しっかりと把握しており、実に立派な学びである。

(3) 第9期同友会大学の卒業生への祝辞と励まし

第9期同友会大学卒業式は、1985年5月15日(水)18:00～21:00に行われ、関口功四郎同友会大学学長、石山博規代表理事、大久保尚孝専務理事、講師陣からは、是永純弘北海道大学教

授、竹田正直同教授、伊藤三郎同窓会代表（㈱日本除雪機製作所、設計部副部長）や、受講生を送りだした企業のトップが参加した。

関口学長は、卒業を祝し、38名を含め卒業生が368に達し、これは「暗黒に一条の光を見るよう」だと述べている。さらに「同友会大学の学びは異常な迄の労苦をとまったことと思います。然し、労苦に比例して、各人の喜びの大きさも学びの深さも増し加わったはずです。」そして峻厳な山なみがあっても、「否定的でなく、積極的な考え方、処理の仕方ですら山頂を征服し欲しい」と望み、「同期の友を大切にしながら、助け合いながら、学び合いながら、長い道のりを息切れしないようにご健闘あらんことを祈ります。」と励ましを与え、最後に好きなことばを贈っている。「艱難は忍耐（がまん）を生み出し、忍耐は練達（ねりあげられた稟性）を生み出し、練達は希望を生み出すものである。」^(注13) 卒業生の大変な「労苦」に思いをよせながら、温かいはげましの祝辞である。

石山代表理事は、「仕事をかかえながらの勉強は、非常に大変だったと思います。みなさんの努力もさることながら、ご家族と会社の協力がなければ、卒業することはできなかったでしょう。ご家族の方は、『うちのお父さんは、こんなに勉強する人だったろうか』と、改めて高い評価をしているのではないのでしょうか。（中略）人間の頭は、自動車と同じで、使えば使うほど充電されていきますが、使わないでいると放電して、元の木阿彌になってしまいます。今は各企業とも人材の育成に力を入れています。皆さんの会社も、企業の成長と皆さん自身の成長を期待して同友会大学に出されたのですから、その期待に応えるべく今日から頑張ってもらいたいと思います。充電した知力を皆さん自身のために、大いに活用して下さい。」と、祝意と励ましを述べている。ここには、同友会大学の設立時に大久保尚孝専務理事らが理念としたように、企業の即戦力的なノウハウを主として教えるのではなく科学の基礎を教えて受講生の人間的発達に貢献するとの理念が伺える。^(注14)

ついで講師のなかで卒業式に参加した北海道大学是永教授と同じく竹田正直が祝辞を述べた。是永教授は「仕事を抱えながらの夜間通学というものは、口でいうほど簡単なことではありません。大変な忍耐力と強固な意思がなければ、卒業には到らなかったと思います。（中略）この同友会大学でも、東京の二部の学生に教えていたときと同じ真剣さと熱意を感じました。

（中略）日常の仕事の中に勉強の材料はいくらでも、次々と出て参ります。同友会大学で学んだ延長線上で、さらに新たな問題について深めていく決意をしていただければ、大学における勉学の成果は、必ず大きな実りとなってかえってくると信じております。」と、自己の経験や卒業生によりそって励ましている。^(注15) 竹田は、「私は講義の中で、色々と勝手に質問をさせていただきました。それに対して、率直に意見を出して下さい、とても明るい雰囲気の中で、楽しく講義ができたことを感謝しております。私は、『継続は力なり』をモットーとしております。

（中略）皆さんも、職場や生活のあらゆる面で、『継続は力なり』を生かしていただきたいと思います。そのひとつの試みとして、卒業を契機に、なにか古典の文献を読んでみる決意をなさってはいかがでしょうか。」^(注16)

同友会大学同窓生を代表して、第4期卒業生の、伊藤三郎氏が、「皆さんおめでとうございます。(中略)私ども四期生は、卒業後、毎年忘年会もしくは新年会を設け、その他に同期会も開いています。また、四期生の新聞を発行するというはじめての試みも行いました。このような活動を通じて、お互いのレベルアップをはかろうと、つきあいを続けています。限られた期間ではありますが一緒に学んだという仲間意識を大切ににあたためて、共に育ち合い、磨きあっていただきたいと思います。』^(注17)と、述べて、具体的に卒業後の、同期会や同窓会のあり方を示して共育活動の継続をしめしており、実に貴重な祝辞である。

最後に第9期全体の「講評」を、大久保尚孝専務理事が行っている。大久保氏は、まず、受講生の積極面として、「受講態度が非常にまじめだったことが印象的」だったとして、具体例として遅刻や途中退席の少なさと、規定のレポート提出が遅れて卒業出来ないのがわかってからも5人の受講生が講義を受けていたことをあげ、「本当に学びたいことを学ぼうという姿勢を持ち続けたあらわれ」と高く評価した。しかし、成績の評価では、全体の平均点は、61.1点で「九期の中で第九位」、卒業率は、77.5%で、9期中第8位と厳しい評価を述べた。レポート課題にたいして「いったいなにを答えるべきなのか、こなしきれていなかった」と指摘した。「従って、グイグイと胸に迫ってくるレポートは比較的少なかったといえます。(中略)さきほど、講師の先生から、継続は力であるというお話がありました。第九期の皆さんには、同期会で自主的なゼミナールをつくって、大学の先生方に積極的に指導をお願いしながら運営していくことを期待したい。(中略)同友会大学のように、地元の大学の先生と経営者の方の協力をあおぎながら、地に足をつけた、実践的で高度な勉強をする社員教育というのは、日本中探しても、どこにもありません。日本の教育史上に新しいページを開くものといえます。(中略)新たな産学協同の実を求めて一步踏み出し、社会的、歴史的な期待に応えていただくならば、同友会大学を開設した意味と、卒業生の価値が大きく開花することでしょう。皆さんのこれからのご奮闘を心から期待します。』^(注18)

大久保専務の講評は、これまでも常に厳しい指摘がなされてきたが、第9期は、平均点がこれまでの最低であり、卒業率も最後から2番目の低さということだが、全体としては、学びの真面目さのみならず、歴史的意義をふくめての今後の自己教育の道をしめした実のある激励となっている。

西谷博明事務局長は、第9期生記録集の編集後記で次のように書いている。「第九期生の皆さん卒業おめでとうございます。(中略)“継続は力なり”という言葉は、第九期生の合言葉になった感があります。ぜひ、学ぶことを継続してほしいと思います。“学ぶとは知らないことが増えること”，疑問に思うことが多くなればなるほど、人間は学ばずにはいられないものです。題字の『継続』は、そんな思いを込めて(?)畑中さん、河野さん、佐久間さんの三人から提案していただいたものです。この記録集をいつも座右において、目ざとく、耳ざとく、発展的に学ぶことを“継続”して参りたいものです。自戒の念を込めて!」^(注19)

ここには、筆者が同友会大学第9期単元Ⅵの第3講義「教育とは何か」のなかで、知識の再

近接領域論の模式図を示しながら、更に展開した未知の拡大と、私のモットーとして講義でも話した「継続は力なり」を見事に結びつけて、受講生を励まし、今後の展望を示してくれている。見事というほかはない。さらに言えば、全体の平均点の最下位も、卒業率の低さと結びつけて考えると、卒業生の中での第9期卒業生の成績はかなり高いことも推測される？

第2章 北海道中小企業家同友会第10期同友会大学

(1) 第10期同友会大学の日程と講義編成

北海道中小企業家同友会第10期同友会大学は、1985年（昭和60年）7月11日（休）～同年11月7日（休）、第1ビル会議室で、毎週、火曜と木曜の夜、18:00～21:00、に行われた。

単元構成は、Ⅰ～Ⅵで変わらないが、単元構成と同列の扱いで、従来、単元Ⅵ「中小企業幹部論」の最後、つまり全講義の最後に、大久保尚孝専務理事が担当していた講義を、単元ではないが、「総括講義」として行うこととした。講義テーマは従前と同じである。また、単元名称の変更も見られる。単元Ⅱ、Ⅲ、Ⅴは従前と同じだが、単元Ⅰが、「日本経済と中小企業」から「経済と中小企業」へ変わっている。グローバル経済への視点を重視した故であろうか。単元Ⅳが、9期は「現代営業幹部論」だったのが、「中小企業幹部論」に変わっている。それと関連して単元Ⅵの名称が、従前の「中小企業幹部論」から、「人間と教育」に大きく変化している。この単元名称はその後長く継続される。^(注20)

各単元の講義数は、第9期と同じであるが、上記に述べた、大久保専務の講義が独立したことによって、単元Ⅵが1講義減少して5講義となった。

担当講師の変更では、単元Ⅰの第1講義「社会発展と経済学」が、北海道教育大学三好宏一教授から、北海道大学教授森杲教授に変わっている。なお、森教授が第9期で担当していた単元Ⅰ第5講義「現代の情勢をどう把握するか～グループ討議」は、そのまま継続している。したがって、森教授は単元Ⅰの第1と第5の二つの講義を担当することになった。

単元Ⅱでは、第2講義「日本国憲法の性格と今日的意義」の担当が、第9期の郷路征記弁護士から中村仁弁護士に変わっている。郷路征記弁護士は、第9期で伊藤誠一弁護士が担当していた「労働法の基礎知識」を第6講義で担当している。中村弁護士が第9期で担当していた、「民・商法の基礎知識」は、新たに太田勝久弁護士が担当している。

単元Ⅲは、第9期で「経営分析」と「経営分析～グループ討議～」の2つの講義を上村昭紀税理士が担当していたが、第10期では、「経営分析(1)」と「経営分析(2)～グループ討議～」として、(1)をあらたに、池脇昭二税理士が担当し、上村税理士は(2)のみの担当となった。

新たな単元名称となった単元Ⅳ「中小企業幹部論」は、第9期同様、^(株)共同印刷木野口功社長以外の3人が変わり、第10期は、第1講義「幹部の任務と役割」は、恒星設備^(株)太田一彦社長、第3講義「幹部に必要な現代のマナー」は西谷博明事務局長の担当、第4講義「営業力アップのために～グループ研究～」は^(株)エミヤ商会三神純一社長、が担当している。

単元Ⅴ「科学技術論」5講義のうち、北海道大学田中一教授、同青木由直教授、同赤石義紀助教授は、講義順に一部変更あるが担当とテーマは変わらない。変わったのは、「現代の技術革新がどこまですすんでいるか」に北海道大学吉田文和助教授が再登場しているのと、「中小企業の技術開発」を北海ダンロ(株)佐藤雄一専務にかわって、北上徳郎(株)北上商店専務と井上一郎(株)光合金製作所社長が新たに担当していることである。

単元Ⅵは「人間と教育」に名称変更され、若干講義順が変更し、北海道大学教授竹田正直「教育とは何か」が第1講義となった。9期の「部下をどう教育するか～現代人の社会心理と組織の活かし方～」北海学園大学後藤啓一教授は、10期で、(1)と(2)の2つの講義となり、後藤教授は9期と同じテーマで(2)を担当し、北海道教育大学小田切正教授が(1)サブテーマ「現代青年の意識と行動」を担当している。

単元と講義内容、担当者の変化は、第10期ということで、大幅な改革を期待したが、単元構成にその気迫が若干感じられるとしても、総じて、これまでの各期の改革にプラスアルファである。

なお、第9期では、入校式での受講生の決意表明を、卒業生記録集に掲載したが、第10期の『同友会大学第十期生記録集“飛躍”』にも、1985年7月11日の入校式での受講生代表の決意表明と、あらたに入校式での講師の祝辞が掲載されている。通常、入校式では、学長と代表理事の挨拶、講師の祝辞、決意表明と続くが、学長や代表理事の挨拶は掲載されていない。

講師の挨拶は、北海道大学教授竹田正直「未知は知のもと、知は力なり」^(註21)のテーマで掲載されている。竹田は、「第十期という歴史的な同友会大学に入校された皆さんは、大変光栄だと思います。私は入校式にあたり、『知は力なり』という言葉を贈ります。」技術革新や情報社会の「知識」の知のみならず、「知人」の知であることもわすれないことを述べ、「未知とは、知識という核があって生まれるものであり、知識という核の円周部分と言って良いでしょう。(中略)知識という核が大きくなればなるほど未知の部分も大きくなります。(中略)『未知は知のもと、知は力なり』のことをしっかりと押さえ、奮闘してほしいと思います。」と、励ました。

受講生の決意表明は、北星情報処理開発(株)福岡博営業課長が行った。「幸いにしてこのたび、同友会大学第十期生として入学する機会をえることができました。(中略)私達も学ぶ以上は、この機会を十分に生かし幅広くかつ深く学び、私達自身の向上ならびに企業及び地域社会の一助になるべく努力することを決意し、ここに表明致します。』^(註22)

(2) 第10期同友会大学の受講・卒業生の特徴と感想

北海道同友会第10期卒業式は、1985年11月7日、午後6時から第1ビルで行われた。

第10期生は、入学51名にたいして、卒業条件(出席率80%以上、レポート5本と卒業論文の計6本の論文50点以上)をクリアした受講生は43名で、卒業率84.3%で、10期中第4位であった。皆勤賞は、27名で卒業生への比率で62.7%で、これまでの10期中で第1位の高さであった。この皆勤賞率は、2016年の第65期まででも第5位という実に立派なものである。この

資料 3

北海道中小企業家同友会「同友会大学」講義カリキュラム（第10期）

日 程	講 義 テ ー マ	講 師
1985 年 7 月 11 日(木)	開 校 式 ◎学長あいさつ，教育委員会の紹介，ガイダンス ◎班編成の発表，性格・職業興味検査	
単元Ⅰ 経 済 と 中 小 企 業		
7 月 16 日(火)	◎社会発展史と経済学	北海道大学 教 授 森 杲氏
7 月 18 日(木)	◎世界の政治・経済情勢の焦点	北海道大学 助教授 佐々木隆生氏
7 月 23 日(火)	◎戦後日本経済と中小企業	北海道大学 教 授 富森 虔児氏
7 月 25 日(木)	◎北海道経済の歴史と産業構造の特徴	北海道大学 教 授 山田 定市氏
7 月 30 日(火)	◎現代の情勢をどう理解するか ～グループ研究～	北海道大学 教 授 森 杲氏
単元Ⅱ 経 営 と 法 律		
7 月 31 日(木)	◎法とは何か ～判例にみる法の運用の研究～	札幌学院大学 教 授 鈴木 敬夫氏
8 月 6 日(火)	◎日本国憲法の性格と今日的意義	弁護士 中村 仁氏
8 月 8 日(木)	◎民・商法の基礎知識	弁護士 太田 勝久氏
8 月 13 日(火)	◎債権の管理と回収(1)	弁護士 向井 清利氏
8 月 15 日(木)	◎債権の管理と回収(2)	弁護士 向井 清利氏
8 月 20 日(火)	◎労働法の基礎知識	弁護士 郷路 征記氏
単元Ⅲ 企 業 会 計 の 基 礎 知 識		
8 月 22 日(木)	◎企業の実力を判断するために ～危ない企業の見分け方～	(株)帝国データバンク 札幌支店長 大宮 辰男氏
8 月 27 日(火)	◎経営分析(1)	税理士 池脇 昭二氏
8 月 29 日(木)	◎経営分析(2) ～グループ研究～	税理士 上村 昭紀氏

日 程	講 義 テ ー マ	講 師
単元Ⅳ 中 小 企 業 幹 部 論		
9月3日(火)	◎幹部の任務と役割	恒星設備(株) 社 長 太田 一彦氏
9月5日(木)	◎営業とは何か ～目標の設定と達成の手順～	(株)共同印刷 社 長 木野口 功氏
9月10日(火)	◎幹部に必要な現代のマナー ～営業と職場のマナーの再点検～	北海道同友会 事務局長 西谷 博明氏
9月12日(木)	◎営業力アップのために ～グループ研究～	(株)エミヤ商会 社 長 三神 純一氏
単元Ⅴ 科 学 技 術 論		
9月17日(火)	◎科学と人間 ～自然科学の発展と人間生活～	北海道大学 教 授 田中 一氏
9月19日(木)	◎現代の技術革新はどこまで進んでいるか ～社会の発展と技術の歴史～	北海道大学 助教授 吉田 文和氏
9月24日(火)	◎コンピュータの基礎概念 ～情報化時代への対応～	北海道大学 教 授 青木 由直氏
9月26日(木)	◎中小企業の技術開発 ～その発想と具体例～	(株)北上商店 専 務 北上 徳郎氏 (株)光合金製作所 社 長 井上 一郎氏
10月1日(火)	◎科学技術の発展と今日的課題 ～グループ研究～	北海道大学 助教授 赤石 義紀氏
単元Ⅵ 人 間 と 教 育		
10月3日(木)	◎教育とは何か ～社会と教育の発達歴史～	北海道大学 教 授 竹田 正直氏
10月8日(火)	◎人間と話し言葉 ～話し言葉の再確認～	(株)北海道邦楽邦舞協会 (元 HBC アナウンスアカデミー所長) 事務局長 平沢 秀和氏
10月11日(金)	◎部下をどう教育するか(2) ～現代人の社会心理と組織の活かし方～	北海学園大学 教 授 後藤 啓一氏
10月15日(火)	◎部下をどう教育するか(1) ～現代青年の意識と行動～	北海道教育大学 教 授 小田切 正氏
10月17日(木)	◎知恵ある人間に育つために	札幌学院大学 教 授 方波見雅夫氏
総 括 講 義		
10月22日(火)	◎中小企業の未来と私たちの課題 ～同友会大学で何を学んだか(グループ討論)～	北海道同友会 専務理事 大久保尚孝氏

資料 3，出典：西谷博明事務局長責任編集『同友会大学第十期生記録集“飛躍”』，北海道中小企業家同友会社員教育委員会発行，1985 年 12 月，10～11 頁。

要因は、関口功四郎学長が述べているように、第2グループは、「レポートの提出が迫るとお互いに電話をかけて励まし合ったり、欠席者に講義内容を教えたりしていました。一人でも脱落者を出すまいというグループの連帯感が功を奏し見事全員卒業を果たしました。実に感動的な出来事だったと思います。」^(註23)と、まさに共育活動を実践したのである。

しかし、平均点は、後ろから第1位で、最優秀賞も優秀賞もおらず、努力賞2名であった。努力賞は、^(株)ナニワ奈須野益主任と、入校式で決意表明を詠んだ北星情報処理開発^(株)福岡博営業課長の二人であった。

卒業した第10期性は、今回は遠方からの受講はなく、恵庭市と小樽市から各1名いるだけである。取締役は5人で、うち社長は1名である。また、受講者51名中、女性は2名のみである。各企業から複数以上の卒業では、丸三繊維^(株)が4名であり、多分、同一企業から4名の卒業生は、同友会大学はじまって以来、初めてであろう。これについては、送り出した社長と受講生の想いが綴られている。丸三繊維^(株)川原信二社長は、「私はこの四月に社長に就任したばかりです。(中略)今まで研修らしい研修には参加しませんでした。しかし、これからの会社は、世の中の動きに敏感に対応できる、そんな若々しさが大切です。そこで今回一度に四人の受講生を出したわけです。四人が無事卒業できましたので、新風を吹きおこしてくれることでしょう。私もおちおちしてられません。彼らの期待に応えられるような会社作りをしていきます。」^(註24)

同社からは、北田恒夫販売2課係長、團強志販売1課係長、土井秀雄総務課長、渡辺徹商品3課長の四人であるが、北田恒夫係長は次のように書いている。「うちの会社からは四名の社員が受講しました。入校が決まったとき、社長は、『同友会大学は難しいと聞いているから半分卒業できれば御の字だ』と言ってました。しかし、大学を卒業できるか否かは職場では死活問題です。四人全員が『自分は絶対に落ちこぼれないぞ』とがんばったおかげで、皆無事卒業することが出来ました。今思えば、まんまと社長の思うツボにはまった、というところですよ。これからも大学で学んだという貴重な宝をもとにして、四人で競い合いながら頑張って参ります。」^(註25)

さらに3人の卒業生をだしているのが、^(株)サンコーで、大山憲一西営業所次長、竹田周二月寒営業所主任、宮下佳巳開発課係長である。2人の卒業生がいるのは、北海道林友観光^(株)、三元社印刷^(株)、共同印刷^(株)、北星情報処理開発^(株)、道央機器^(株)の5社である。

筆者が、入校式で励ましとして述べた「知は力なり」を覚えていて受講の感想を述べたのが、シオン・樹脂工業^(株)北広島工場営業高橋健夫課長であった。「大学に入る前は、稚内、網走と全道をくまなく駆け巡っていました。入校の時、私は泣く泣く現場の人間に仕事をまかせて大学の門をくぐったのです。大学の講義は、聞きしにまさる名講義の数々。後輩のことを気にしつつもレポートに追われる毎日でした。それまでの勉強不足を痛感し、しまいには『知は力』と励ましてくれた竹田先生の講義は『遅は知空』と聞こえる始末です。卒業が決まった日、暫くご無沙汰していた役所に、お詫びを兼ねて電話を入れました。すると返ってきた言葉は、『もう

資料 4

答 辞

本日は同友会大学第10期生の卒業式にあたりまして、御臨席賜りました皆様の、数々のあたたかい励ましの御言葉、心より御礼申し上げます。

記録的な暑さの中で、少年のように緊張した開校式、気がつくとは街はすでに秋から冬へのたたずまいを見せはじめております。気が遠くなるような長い道程に思えた4カ月でした。

しかしその不安も、日々の講義の内容が一気に吹きとばしてくれました。

諸先生の講義は常に新鮮で、感動に満ちたものばかりでした。それぞれの講義の時間が短かく、諸先生は言いたい事の半分も言えない状態であったと思われませんが、最高水準の知識や教養の一端を見せていただいたという事は、生涯の大きな財産になると確信しております。

この4ヶ月間、やはり一番つらかったのは、レポートの作成です。参考文献を何度読んでも原稿用紙を前にすると、何も書けない。この時程、日常いかに勉強をしていないかを思い知らされた事はありません。レポートがなければ、なんと楽しい大学だろうと何時も考えていた程です。

しかし、今苦しいからこそ喜びがあり、学ぶことに平坦な道はない事を知りました。もっともっと学ぶ時間がほしい——との思いがつのり、時間の貴重さをかみしめております。

私達が同友会大学で学んだ事は日本の中小企業が置かれている現状と、その進むべき方向の示唆であったと思われます。

日常の学習をさらに積み重ね、正しい方向を見極める力を磨き上げたいと思っております。

私達は学習の中で、中小企業は地域経済の、そして日本経済の担い手である事、日本の平和を築き上げる担い手でもある事を学びました。

地域の暮らしに寄与し、地域の信頼を勝ちとれるような企業づくりが今、私達に要求されています。同友会大学で学んだ知識を基礎にして、企業の真の発展のために、全力を投じる決意です。

最後に、業務が多忙を極めるこの時期に、同友会大学に送り出して下さいました経営者の皆様方、どんなに忙しい中でも同友会大学のため、という事で心よく支援してくれた職場の仲間達、そして事務局の皆様方に深く感謝すると同時に、常に格調高く講義していただいた諸先生に、今後も引き続き御指導、御鞭撻いただく事をお願いいたしまして答辞といたします。

1985年11月7日

北海道中小企業家同友会
同友会大学第10期生代表
株式会社ナニワ
奈須野 益

資料4、出典：西谷博明事務局長責任編集『同友会大学第十期生記録集“飛躍”』、北海道中小企業家同友会社員教育委員会発行、1985年12月、69頁。

来なくともいいよ、後任者で充分だから』でした。なんと嬉しい言葉だったことでしょう。私が大学へいっている間に、一人立派な後輩が育ったのです。私も負けてはいられません。知を真の力としてがばってまいります。』(註26)

(3) 第10期同友会大学の卒業生への評価と励まし

これまでは、大久保専務理事が「講評」を行ってきたが、第10期卒業式では、関口功四郎学

長（シオン・樹脂工業㈱社長）が、講評を行い、さらに卒業の祝辞も述べた。第10期は相互の学び合いや皆勤賞率1位の優れた面と、レポート・卒業論文の平均点が最下位という面もあり、関口学長の祝辞も励ましに力を込めた。「同友会大学の開校式の時、北大の竹田教授が『知は力なり』とおっしゃいました。それをもじって「遅は知空なり」と見事に学びの大切さを喝破した受講生がいました。学びのスタートが遅くなればなるほど知力が身につかなくなります。そういう意味では同友会大学に学ばれたことは、これから一生涯学び続ける決意を固めたことになるのです。（中略）どうか同友会大学の学びをベースに、高く目標をかかげ、地域からも職場からも信頼される人として、遅しく成長して下さい。皆さんのご健闘を心からお祈り申し上げます。」^{（註27）}

ついで、北海道同友会井上良次代表理事（㈱光合金製作所会長）が、卒業の祝辞と敬意、そして健康管理の大切さを述べた。「同友会大学で鍛えた知力も健康の裏づけがなければ、水泡に帰してしまいます。（中略）皆さんは社会科学、自然科学、教育学等々、主要な学問の基本を四ヵ月間を通して学ばれました。このことはとりもなおさず現代の幹部に求められている一番重要な能力、情勢を科学的に把握する力を身につけたことになるのです。」^{（註28）}自分の健康を大切にし、足元をしっかりみつめると共に学んだ科学的力を統一して健闘するようはげましている。

卒業式に出席した講師の一人札幌学院大学方波見雅夫教授は、学生時代に、『銭形平次』の作者野村胡堂宅でベートーベンを聴き、軍隊で病気のため死線をさまよったときにベートーベンの第九を聴き感動した体験を紹介し、「人間は美しいものに触れて感動すると、頭の中で特別のホルモンが分泌し生き生きと明日への仕事に向かう活力が生まれます。逆に感動する心を忘れると頭がボケてしまうのです。人間が本来持っている、美しいものに感動するという心を持ち続け、前向きの生命力を燃え立たせて下さい。」^{（註29）}

同友会大学同窓会岡村敏之会長（ダイヤ冷暖工業㈱専務）は、「栄えある十期生の皆さん、本日はご卒業おめでとうございます。（中略）第二グループの助け合い運動、過去最高の皆勤率など、皆さんは胸を張って卒業できる足跡をのこされたのではないのでしょうか。同友会大学の学びは卒業したからこれで終わり、というものではありません。学びの成果をどう仕事に生かしていくかで真価が問われるのです。」と祝意と励ましを述べ、同窓会入会と同時に、①、同期会の結成と年1回の開催、②、年2回の同窓会研修会への参加、③、同友会主催の講演会・研修会への参加をお願いした。^{（註30）}

卒業式およびその後の卒業祝賀会に、いわゆる「保護者」として出席した経営者たちの祝辞からいくつかを取り上げておきたい。

道央機器㈱村瀬貞夫社長は、初めて卒業生を出せたのは、安達省二氏と糸瀬久司氏が入学を志願してきたからで、「これはいいところまで行くな」と期待していたが、次第にレポートに悩むようになってきた。「ある日、5時15分にお客様からクレームの電話が入りました。5時30分には会社を出ないと大学には間に合いません。皆勤賞を目指していた安達ですが、自らそのクレームを処理すべく仕事を優先させたのです。大学に出るとこんなに人が変わるのかと改め

てそのすばらしさを認識した出来事でした。」このことについて、皆勤賞を逃した安達省二氏は、「一講だけどうしても聞けなかったわけですが、仕事を何よりも優先せよというのも大学の教えでしたので後悔はしていません。ただ、逃がした獲物は大きいといいますが、その講義の内容はいまでも気になっています。」^(注31)

同友会大学受講を2期生の部長任せにしていたという北星情報処理開発(株)白旗善一社長は「二人三人と卒業生が出て来るうちに社内の雰囲気はどんどん変わってくるではありませんか。これは何故だろうかと気になり、今日式に出席した次第です。(中略)講師の方や卒業生の皆さんの話を聞き、同友会大学のすばらしさ、よく分かりました。私も部長にまかせていた態度を改め、卒業生たちをバックアップするよう共に努力して参ります。」^(注32)

おわりに～“共育”活動の構造について～

北海道中小企業家同友会は、1969年に設立され、すでに、5,780人の道内中小企業経営者が加入し、中小企業家同友会全国協議会(中同協)のなかで、東京、名古屋、大阪の同友会の加入者数を大きく超えて、常に全国一位の加入者数を有している。活動方針についても、1973年の中同協の第5回全国総会(愛知)に同友会の3つの目的を提案して採択されたが、その2点目に「“共育”活動」がふくまれており、45年前から、“共育”が中同協の社員教育の基本用語となってきた。

筆者は、近年、共育活動について、本紀要第99号に次のような内容を記した。

北海道中小企業家同友会が、中同協第5回全国総会(愛知)で、社員教育を「共育」と提起したが、「共育」を、いつから、どういう経緯と意味で用い始めたかは未解明の課題である。竹田自身は、1964年12月25日公開の雑誌論文で提起している。「教育は“共育”であり、教育の主人公は生徒である」と書き、“共育”は集団を教育する際のカナメともいえる概念であるとし、第1に集団の成員相互の訓育作用であり、第2に、教育者と教育を受けるものとの相互の訓育作用である、という2つの内実を有する概念としておよそ54年前から、つまり、中同協や北海道同友会の結成以前から用いている。その後、さらに、ヴィゴツキーの知識の最近接領域論にもとづく人間の発達のメカニズムとも関連して論じている。」^(注33)

上記の筆者の「共育活動」を同友会大学の活動と関連付けて検討する。

1つには、「直接的共育活動」と名付ける同友会大学内部での共育活動である。これには、第1に、講師と受講生との間の共育活動で、圧倒的には講師が教える活動であるが、受講生から講師が学ぶ活動もある。第2は、受講生同士の相互共育活動であり、授業中のみならず授業外での相互活動もある。第3は、学長、社員教育委員会、代表理事、事務局と講師や受講生相互の共育活動である。

2つには、「間接的共育活動」と名付ける同友会大学の外部での共育活動である。これには、第1に、受講生を送り出した企業での共育活動があり、第2は、受講生の家庭での共育活動で

あり、第3に、卒業後、全員が参加する同窓会での共育活動である。

第9・10期でこれをみると、「直接的共育活動」の第1では、言うまでもなく、圧倒的に講師が教える活動が主要な側面であるが、部分的に講師の学びを感じさせる記述もある。第9期単元Ⅴ「科学技術論」の「現代の技術革新はどこまで進んでいるか～社会の発達と技術の歴史」を担当した是永純弘北大教授は、大学夜間部での経験にふれ、働きながら学ぶ人たちの「着想を体系的に研究すれば、大変に独創的な仕事生まれてくるでしょう。事実、博士論文に匹敵するレポートを目にしたこともあります。」と述べている。^(注34)

筆者も、第9・10期の夫々の講義で、必ず数回、課題を提示してのグループ討議や全体討議を行っており、受講生とのこの討議から自分にとって新しい発想や着想を学んでいる。

「直接的共育活動」の第2では、関口学長や西谷事務局長がのべていたように、第10期生の第2グループは、全員卒業を目指してレポートしめきりが迫ると電話で激励し合い、欠席者には講義内容を伝え、見事全員卒業を実現した。また、前述のように、丸三繊維^(株)では、10期に4名の受講生を送り、社長の助言も功を奏し、見事全員卒業を実現している。受講生相互の共育活動の結実である。10期の皆勤率トップの要因のひとつに複数受講生を送った企業が多かったこともあり、複数受講は共育活動に有効だった。

「直接的共育活動」の第3では、「グループ研究」を第7期からほとんどの単元に導入し、さらに、講義中のグループ討議のために、入学時から受講生のグループ分けをして「共育活動」を促したことである。

「間接的共育活動」の第1については、企業での顕著な共育活動への着想と実施が述べられていた。第10期卒業式に「保護者」として出席した佐藤せつ子^(株)共同印刷（現^(株)アイワード）共育部長は、自分が第8期生で卒業した懇親会の席上、木野口功社長から「共育部を設けるが佐藤も候補の一人だ」と言われ、「私が、共育部長になって最初にした仕事は、近藤〔重雄印刷I課長〕や三浦〔幸司総務部課長〕に同友会大学の受講を納得させることでした。』^(注35)と述べ、新しく企業内に共育部を新設したことを紹介している。

「間接的共育活動」の第2、家庭での共育では、^(株)北海紙工梅田昭社長が取締役の妻から同友会大学の受講を希望されたので「講義内容は全部テープにおさめ、仕事の合間に二人で繰り返して聞きました。レポート書きを手伝わされ、私の方が勉強になったくらいです。』^(注36)と、家庭での共育力を認めている。

「間接的共育活動」の第3では、第9期の卒業式で同窓会代表として祝辞を述べた伊藤三治社長は自らの第4期生が同期会の新聞発行を紹介しているが、新しい共育活動である。

これら6つの活動を今後さらにきめ細かく抽出、分析することが課題である。

注

（注1）中小企業庁が2016年1月に、『平成26年経済センサス・基礎調査』をもとに発表した日本と北海道のデータによれば、北海道（2014年）では、中小企業は企業数で99.8%、従業員数で85%

であり、大企業は0.2%と15%である。日本全体(2014年)では、夫々、中小企業が99.7%,70%,大企業が0.3%と30%であり、北海道の従業員数で中小企業の占める割合は、いっそう高い。一般社団法人北海道中小企業家同友会「2016年合同入社式」資料,2016年,11頁。

(注2) 北海道中小企業家同友会の機関誌『北海道同友』第66号,2018年,2頁。

(注3) 同上,3頁。

(注4) 竹田正直「北海道における中小企業家同友会の教育」,北海学園大学開発研究所『開発論集』,第90号,2012年9月刊,21~39頁。竹田正直「北海道における中小企業家同友会の教育(2)」,北海学園大学開発研究所『開発論集』,第92号,2013年9月刊,141~160頁。竹田正直「北海道における中小企業家同友会の教育と大久保尚孝氏」,中小企業家同友会全国協議会企業環境研究センター編『企業環境研究年報』,第18号,企業環境研究センター刊,2013年12月30日,81~96頁。竹田正直「北海道における中小企業家同友会の教育(3)」,北海学園大学開発研究所『開発論集』,第94号,2014年9月刊,19~32頁。竹田正直「北海道における中小企業家同友会の教育(4)」,北海学園大学開発研究所『開発論集』,第96号,2015年9月刊,1~15頁。竹田正直「北海道における中小企業家同友会の教育(5)」,北海学園大学開発研究所『開発論集』,第99号,2017年3月刊,57~73頁。竹田正直「北海道における中小企業家同友会の教育(6)」,北海学園大学開発研究所『開発論集』,第100号,2017年9月刊,23~39頁

(注5) 西谷博明事務局長責任編集『同友会大学第九期生記録集,“継続”』,北海道中企業家同友会社員教育委員会発行,1985年7月,10~11頁。同友会事務局は,第1ビルの5階フロア全てを占め,同友会大学の講義室は7階南面であった。

(注6) 同上,7頁。決意表明は,入校式で毎回おこなわれてきたが,その決意表明が第9期の記録集『継続』に卒業式での答辞と共に掲載された。記録集の責任編集は第1期から第5期までは,国吉昌晴事務局長が,その後,国吉昌晴氏が全国の同協への転出により,西谷博明事務局長が就任し記録集の責任編集を担当したのは第6期からである。したがって,この決意表明の掲載は西谷氏によるものと思われる。

(注7) 同上,3頁,76~77頁。

(注8) 同上,13頁。

(注9) 同上,74頁。

(注10) 同上。

(注11) 同上,24頁。

(注12) 同上,42頁。

(注13) 関口功四郎「練達は希望を生み出す」,同上,1頁。

(注14) 石山博規「卒業生は学びの先陣をきろう」,同上,8頁。

(注15) 是永純弘「更なる飛躍を期待して前進あるのみ」,同上。

(注16) 竹田正直「継続は力なり」,同上,9頁。

(注17) 伊藤三郎「同期生は連帯し共に育ちあおう」,同上。

(注18) 大久保尚孝「新たな産学協同の道を切り拓こう」,同上,2頁。

(注19) 同上,77頁。

(注20) 西谷博明事務局長責任編集『同友会大学第十期生記録集“飛躍”』,北海道中小企業家同友会社員教育委員会発行,1985年12月,10~11頁。

(注21) 同上,8頁。

(注22) 同上,6頁。

(注23) 同上,2頁。

(注24) 同上,43頁。

- (注 25) 同上，45 頁。
- (注 26) 同上，54 頁。
- (注 27) 関口功四郎「生涯学びの決意をかためよう」，同上，2 頁。
- (注 28) 井上良次「情勢を正しく判断する力を」，同上，8 頁。
- (注 29) 方波見雅夫「“感動” が若さを保つ」，同上，9 頁。
- (注 30) 岡村敏之「学びの成果を仕事に生かそう」，同上。
- (注 31) 村瀬貞夫「仕事優先の姿に感激」，安達省二「これも大学の教えです」，同上，14～15 頁。
- (注 32) 白旗善一「社長自ら深く反省」，同上，60 頁。
- (注 33) 竹田正直「北海道における中小企業家同友会の教育(5)」，北海学園大学開発研究所『開発論集』，第 99 号，2017 年 3 月刊，57～73 頁（うち上記引用部分は 71 頁）。なお，そのさい，筆者による「共育」の提起を 63 年前としたが，53 年前が正しい。
- (注 34) 是永純弘「更なる飛躍を期待して前進あるのみ」，前掲『同友会大学第九期生記録集，“継続”』，8 頁。
- (注 35) 佐藤せつ子「卒業は戦いの始まり」，前掲『同友会大学第十期生記録集 “飛躍”』，52 頁。
- (注 36) 同上，23 頁。